

3.11

IPMU 機構長

村山 斉 むらやま・ひとし

2001年9月11日、私はアメリカの素粒子物理の将来を議論するため、サンタフェの高エネルギー物理学諮問パネルのミーティングに来ていました。目覚ましのためにラジオが鳴るようにしていたところ、世界貿易センターに飛行機が突っ込んだという話が聞こえてきました。委員の一人はマンハッタンの住民で、何度お子さんたちに電話をかけても通じませんでした。夜やっと連絡がとれました。タワーが潰れる前、彼女のお子さんたちは世界貿易センターから飛び降りる人たちの姿を見たということでした。

2011年3月11日、世界の色々な国からの共同研究者とすみれ計画について話し合うため、アメリカ、プリンストンにいました。CNNのニュースを見ていると、まるで日本全体が海に沈んだかのような印象です。日本の知り合いに電話をかけても二日間通じません。その後日本に戻り、福島第一の状況が悪化していく様子を見ました。

三重の大災害の中にあっても、人々が落ち着いて素早く避難する様子に感嘆しました。9.11と違って、悪意に満ちたテロではなく、これは自然災害でした。しかし再建の努力は何年も続くことでしょう。私の想像力をはるかを超える自然の破壊力には深く畏れを感じました。

この間IPMUでは東北大学の学生を一人受け入れ、またIPMUの学生が一週間ボランティアとして被災地へ行きました。IPMU自身、停電や何度も起きる余震を耐え抜きました。多くのメンバーが災害地へ義援金を送りました。

幸いなことに、数週間の中断のあと、IPMUの生活は普段のものに復帰しました。インフラには大きな損害はありませんでした。今ではセミナーは定期的に行われ、毎日のティータイムはクッキーと議論でにぎやかです。論文も出ています。海外からのビジターは放射能の懸念で確

かに減っていますが、IPMU付近の放射能レベルは実は全米平均より低いのです。

この間励ましの言葉を贈ってくださった皆さまには本当に感謝します。そして今は私たち皆、一番気にしている問題に再び取り組んでいます。宇宙はどういう仕組みなのか。

Director's
Corner